

古医書コレクション目録成立の経緯について

当館の古医書コレクションの解説付き目録がまとまり、ここに刊行されることになった。これにより、このコレクションの存在基盤が確立したといえる。

このコレクションの起源は、千葉医科大学の伊東弥恵治眼科教授が大正末期に眼科を中心とする東洋医学、とりわけ江戸時代の中国眼科の古書に関心を持たれ、その収集に乗り出されたことにある。やがて太平洋戦争の進展に伴い、伊東教授は戦争による古医書の消失、散逸を憂え眼科以外の東洋医学全般の古書と資料の収集を、当時の鈴木宣民講師（後に教授、ついで名誉教授）の助力を得て、精力的に行われた。これらが本コレクションの母体となり 1,406 点～4,084 冊（後の調査による）の書籍が収集された。一方この時期の飛躍的古書の増加は、当時不可能となった洋書購入の費用などを転用するという苦心の成果ともいえよう。

さらに昭和 18 年本県茂原市上永吉で代々眼科医を開業されていた 6 代当院々長千葉江風（弥太郎・弥次馬）氏より先祖伝来の古医書約 1,000 冊が寄贈され戦後正式に登録された。伝聞によると伊東教授の知己であった江風氏が終戦直前に米軍の九十九里浜上陸により貴重な医学古書の焼失を心配されたことによるといわれる。

また昭和 25 年佐倉順天堂の佐藤恒二氏より洋書を含む古医書、約 400 冊を有償で譲り受けた。

これらの契機となったのは、昭和 14 年 5 月 20 日・21 日の千葉医科大学付属病院大講堂で開催された日本医史学会に、これらの古医書が出展されたのが縁でその後伊東教授は千葉大学に東洋医学研究所を設立することを目指されていたという。

なお昭和 26 年には幕末の有名な医家三宅春齡の著書 10 点が孫の三宅しづ氏より贈られ、千葉大学図書館亥鼻分館の一大コレクションが成立した。なお当初これらの図書は眼科教室の所有であり、すべて伊東弥恵治教授を中心にしていたが、図書の中央化ということでこのコレクションは大学図書館の管理下に入り現在に至っている。

この貴重な古医書が、専用保存室もなく、虫損防止の燻蒸も実施されないまゝの、このコレクションにとっては忍耐の時期があった。

そんな折に医学部東洋医学研究会（昭和 14 年発足）の石津谷義昭氏（当時学生）らの有志が先生方の支持を受け、館員の協力のもとに目録化を図り、また保存状態を調査しその成果が『目録予備版』として昭和 56 年に刊行された。これがこのコレクションの存在と保存法への関心を訴えた功は大である。

平成 5 年から樋口が内容解説付きの目録作成を担当することになり週に一日という限られた作業ながら足掛け 15 年を経てそれが完成した。この間、平成 8 年に分館が新設されて、古医書は初めて専用保存室に収納され、また眼科教室に保管されていた一部の貴重資料が当時の安達恵美子眼科教授のご配慮によりここに移された。なお平成 12 年には、作業の進展度を公にする意味と、より良い完成版を作成する上での御教示を仰ぐ意味とをもって『目録中間版』を刊行し、その折に記念の展示会ならびに講演会が開催された。

こうして諸賢のご教示を仰ぎそれらを整理し、完成版をつくりあげる作業が更にすゝめられ、今日に至ったのである。

なお、このしごとをお引き受けするに当たっては、日本医史学会の蔵方宏昌氏に「今、このようなしごとの依頼を受けているのだが」と御相談したところ、ぜひ引き受けるべきだと励ましていただき、私もがんばってみようと思ったのが、そのそもはじまりで、どうしても判らないことがあった時には、日本医史学会の大塚恭男先生や小曾戸洋先生、酒井シズ先生のご教示を仰げるし、この先生方の御著書、論文を参考にさせていただきことを了承していただきこれをまとめることができた。文末になりましたが日本医史学会とこれらの先生がたのお名前を記し併せて謝意を表させていただきます。

樋口 誠太郎

（前千葉敬愛短期大学非常勤講師）